

『我にナジエーシ
ダありー石巻若宮丸
漂流民物語』の連載
がはじまって、はや
いもので四カ月経ち
ました。また今回は
著者からの言葉とい
うことで、私と若宮
丸漂流民との出会い
についてちょっと語
りたいと思います。

私は石巻生まれで
す。父は鮎川の出身
で、大洋漁業で鯨の
解体の仕事をずっと
しておりました。何
度も南水洋に行っ
ています。母は石巻の
湊の生まれです。私
は、山下で生まれま
した。豆腐屋の二階
で生まれたとのこと
です。生まれた場所
が、若宮丸漂流民と
は縁の深い禅昌寺の
近くであることをあ
とで知り、やはりな
にかで結ばれていた
んだなあと思ってい
ます。

石巻で生まれたの
ですが、二才前には
仙台に引っ越して、
そのあとは高校を卒
業するまでは仙台で
暮らしていました。
ただ親戚が石巻にた



作者の大島さん

くさんいましたの
で、夏の時期、特に
川開きの時は、石巻
の親戚の家に預けら
れ、一週間くらい滞
在したものです。い
までも忘れられない
のは、川開きのパレ
ードの時に由利徹が
オープンカーに乗っ
て、白いスーツ姿で
手を振っていた風景
です。

親戚は船乗りが多
かったです。父も船
に乗っていました。
し、いとこたちも遠
洋マグロ船に早くか
ら乗っていましたの
で、海に親しみは感
じていましたが、な
にせかナツチとい
うこともあって、残念
ながら海の男にはな
れませんでした。
大学でロシア語を
専攻し、本来であれ
ばロシア文学の学者

サーカスのステー
ジで熊に道具を渡した
りするのを見て、愕
然としていました。
この会社は九年で
やめました。いま
でもサーカスと呼ぶ
仕事は私の本業です。
大きなサーカスの公
演をするのではなく、
テーマパークなどに
小編成の海外のサー
カスグループをアッ
キングしています。
いまも北海道のルス

から来た日本人善
六物語」と題したも
ので、石巻若宮丸漂
流民をテーマにした
ものです。何故この
本を書くようになった
たかという、本題に
入ります。たまたま
偶然入った古本屋で
『環海異聞』という
本と出会ったことが
きっかけでした。な
ぜかこの本を手にし
て、パラパラと頁を
めくっていると、い

縁を感じたのです。
五千円以上した本で
すので、そのときは
購入できなかったの
ですが、翌日わざわざ
横浜の家からこの
古本屋があった狹窪
まででかけて購入し
ました。読んでみて、
初めて知ることばか
りで、驚いてしま
いました。

癖なのですが、知り
たいと思ったら、す
ぐにでも調べたくな
ってじっとしていら
れなくなります。こ
の本を読んでから数
カ月後に、室浜の奥
田さんという方を訪
ねました。

石巻若宮丸漂流民の
会が結成されました
し、この中で石巻漂
流民が協力した日露
辞典があったので、
それが見つかれば番
組ができるかもしれ
ないという話が出て
きました。たまたま
この年にロシアに出
張する予定があった
私は、中村喜和氏(一
橋大学名誉教授)に
教えていただき、こ
の辞書が保管されて
いるサンクトペテル
ブルグの東洋学研究
所に出向き、この辞
書のコピーをとるこ
とができました。二
〇〇年前の江戸時代
の石巻方言がわかる
というところで、当時
は大きな話題となり
ました。たぶん石巻
日日新聞でも大きく
報道されたと思いま
す。

たのです。
ずいぶん長々と自
分のことを書いてし
まいましたが、今後
とも(すみません、ま
だどのくらい続か
わかりません)よろ
しくお願ひします。
最後にちょっと宣
伝を。漂流民ともサ
ーカスとも関係ない
のですが、こんど長
谷川藩(はせがわし
ゆん)というロシア
文学者の評伝『満洲
浪漫―長谷川藩が見
た夢』という本が藤
原書店から出ます。
ほとんど知られてい
ない人なのですが、
息子さんが保管して
いた二〇冊のノー
トをもとに、函館出
身の長谷川が、満洲
に渡り、満洲崩壊ま
で活躍し、そして戦
後日本に戻ってから
ドン・コザック合唱
団を招聘するなどし
ながら、ロシアへの
夢を抱き続けながら
精一杯生きたその生
涯を追っています。
一〇月はじめには発
売されると思います。
読んでいただけたら
幸いです。

私と若宮丸漂流民

「我にナジエーシダあり」作者 大島 幹雄

ツリゾートにおりま
す。ここで九月二日
まで公演していたサ
ーカスのグループを
連れて、明日には姫
路へと移動すること
になっています。

まから二〇〇年前に
故郷である石巻から
出た船が、ロシアに
漂着して、このうち
の何人かは故郷に戻
ってきたというでは
ないですか。

石巻と私が仕事相
手となっているロシ
アが結びついたこ
と、そして主人公が
船乗りであったこと
と、ここになにか因

身の船乗りたちがロ
シアまで漂着して、
そこでたくましく暮
らし、さらには世界
一周してまで故郷に
戻ってきたのです。
もっと知りたい、そ
して石巻生まれの私
も知らなかったこの
事実は、多くの人が
ちに伝えなければな
いかもしれません。

こうしたことが重
なり、石巻若宮丸漂
流民の会が発足、私
も事務局長に就任す
るなど、いつのまに
か若宮丸漂流民は、
私にとって生活の一
部と言ってもいいよ
うな存在にまでなっ

たのです。
ずいぶん長々と自
分のことを書いてし
まいましたが、今後
とも(すみません、ま
だどのくらい続か
わかりません)よろ
しくお願ひします。
最後にちょっと宣
伝を。漂流民ともサ
ーカスとも関係ない
のですが、こんど長
谷川藩(はせがわし
ゆん)というロシア
文学者の評伝『満洲
浪漫―長谷川藩が見
た夢』という本が藤
原書店から出ます。
ほとんど知られてい
ない人なのですが、
息子さんが保管して
いた二〇冊のノー
トをもとに、函館出
身の長谷川が、満洲
に渡り、満洲崩壊ま
で活躍し、そして戦
後日本に戻ってから
ドン・コザック合唱
団を招聘するなどし
ながら、ロシアへの
夢を抱き続けながら
精一杯生きたその生
涯を追っています。
一〇月はじめには発
売されると思います。
読んでいただけたら
幸いです。